

飛 騰

平成6年11月
第11号



海援隊旗

丘の上にも三年

高知県立坂本龍馬記念館

館長 小椋 克己

三日三月三年。丘の上に建つ坂本龍馬記念館も一つの節目を迎えました。この間全国全道府県から約45万人のお客様が足を運んで下さいました。ありがとうございました。

ところで、二度三度いらした方が「最近はいろいろと増えたね」と言って下さいます。たしかに当初は、龍馬に直接関係のある展示品が少なかったため「脱藩の道案内」「坂本家系図」などを手始めに、館員が自作のパネルを整備、一方で「龍馬の手紙」「血染めの屏風と掛軸」など歴史資料の複製にも努力し、作家宮地佐一郎さん始め多くの方々からのご寄贈品も揃い、季節毎の展示替えもできるようになりました。そのようなわけで、三年の節目を機会に所蔵品や館の生い立ちなどをまとめたささやかな「案

内図録」を作りました。更なる充実への出発点とも位置付けています。

坂本龍馬がそうであったように、常に新しい切り口を持っている記念館でありたい、というのが開館当初からの思いで、館員一同乏しい知恵を出し合ってきましたが、実感は「あっと言う間の三年間」でした。

若い世代と県外のお客様が増えたこと、龍馬資料を活用する方が増えたこと、龍馬についてのいろいろなお問い合わせが増えたこと、展示ケースにつく指紋が増えたこと（熱心に見て下さっている証拠）などがこの間の変化ですが、これらにも全能力をあげてお答えしています。

そして、常設展示のリフレッシュや研修スペース新設などについても、三年の節目を機に考えなければと思っています。どうぞご意見を。

閑話休題…お隣りの国民宿舎桂浜荘の改築も進み、来年2月オープンします。工事中に発見された浦戸城石垣も再現されるとか。ご来館の折には、周辺の歴史散歩もおすすめします。



▲平成3・11・14 マリウス・ジャンセン教授夫妻と橋本邦健氏



▲平成5・11・1 司馬遼太郎メッセージ屏風贈呈式（左、入交好保氏）

開館3周年の歩み

学芸専門員 岡林春雄

当館は、来る11月15日で開館3周年を迎えます。その間の経過や出来事等について、この辺で少し振り返って見ることも大切ではないかと考えて、大小取り混ぜまとめてみました。

平成3年

- 11月1日 開設準備室から移転、開館業務開始
- 8日 展示工事完了
- 14日 落成式行事《神事・式典》記念講演《プリンストン大学教授マリユスBジャンセン氏》及びフォーラム等
- 15日 開館テープカット
《アトラクション龍馬太鼓》



開館のテープカット風景
開館第一日目の入館者数 890名

平成3年の入館者数（11月15日～12月26日）
21,717名

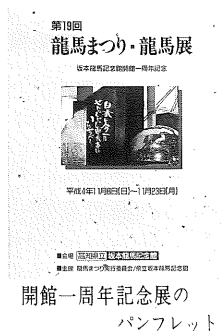
平成4年

- 3月1日 館だより「飛騰」創刊号発行
- 3日 入館者5万人記念事業
香川県国分寺町矢野昌之さん夫妻
- 3日 第8回高知市都市美デザイン賞特賞受賞
- 5月1日 B2F展示品一部模様替え
《血染めの掛け軸等9点》
- 11日 解説補助員に対する研修開始
- 6月1日 坂本龍馬記念館運営審議会
第1回会合 国民宿舎桂浜荘
- 1日 館だより「飛騰」第2号発行

- 23日 入館者10万人記念事業
北海道札幌市広瀬辰男さん夫妻
情報発信用葉書無料サービス
- 7月20日(月)～8月31日(月) テレビアニメ
「おーい竜馬」セル原画展
- 11月8日(日)～23日(月) 開館1周年記念事業
第19回龍馬まつり・龍馬展
- 10月10日 館だより「飛騰」第3号発行



入館者10万人目・広瀬夫妻
(北海道)



開館一周年記念展の
パンフレット

- 12月7日 名古屋市わかこうじ氏より
阪妻プロ制作映画ビデオ贈呈式
- 平成4年入館者数（1月2日～12月25日）
158,091人

平成5年

- 2月1日 館だより「飛騰」第4号発行
- 3月12日 入館者20万人記念事業
東京都練馬区小黑勝之さん夫妻
情報発信用葉書無料サービス
入館者全員に記念品進呈
- 3月20日～5月8日 特別コーナー
「海援隊と長崎」展
- 24日 1日館長橋本邦健氏
お茶のお接待高知商工会議所婦人部
- 5月1日 館だより「飛騰」第5号発行

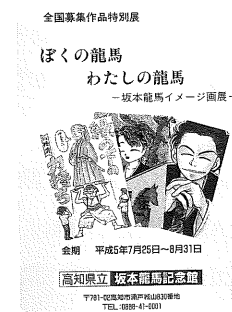


小黑夫妻(東京)
入館者20万人目

- 5月27日 「金のかつお」盗難
- 6月30日 イメージ画募集締切り
- 7月11日 イメージ画展五つの賞選考
- 7月25日(日)～8月31日(火) 「ぼくの龍馬・わたしの龍馬」坂本龍馬イメージ画展
- 8月1日 館だより「飛騰」第6号発行
- 8月20日 坂本龍馬記念館運営審議会
第2回会合 高知市共済会館
- 9月15日 入館者30万人記念事業
兵庫県西宮市幡本昌直さん
情報発信用葉書無料サービス



入館者30万人目・幡本さん(西宮市)



坂本龍馬イメージ画展パンフレット

- 10月1日 館だより「飛騰」第7号発行
- 24日 岐阜商工会議所青年部から高知商工会議所青年部を讃えて寄贈された刀「関孫六」を当館へさらに寄贈する贈呈式
- 11月1日(月)～30日(火)企画展「坂本龍馬の銅像物語」展
- 1日 司馬遼太郎氏の龍馬を讃えるメッセージを入交好保氏が揮毫した六曲屏風の贈呈式
- 15日 サントリー四国支店から当館へ書軸等の贈呈式
- 15日 野点での会煎茶サービス
煎茶淹茶道 宮尻千峰氏
- 29日 「あったかネット」へデータベース用



銅像物語展パンフレット

資料ファイル送付、供用開始

12月26日 坂本龍馬記念館消防訓練
平成5年の入館者数（1月2日～12月25日）
153,819人

平成6年

- 2月1日 館だより「飛騰」第8号発行
- 3月1日 「案内図録」完成・発行
- 3月20日(日)～5月5日(木) 春の企画展「武市瑞山と坂本龍馬」展
- 4月1日 入館料減免基準が改正される
- 5月5日 館だより「飛騰」第9号発行
- 6月8日 「あったかネット」ID及びパスワードが当館単独利用可能となる
- 7月1日 解説補助員の集中配置による運営開始（団体入り口を一般入り口と合併運用）
- 18日 坂本龍馬記念館運営審議会
第3回会合 オリентホテル
- 8月1日(月)～31日(水) 夏の企画展「長崎版画」展



長崎版画展のスナップ

1日 館だより「飛騰」第10号発行
9月1日 案内図録完成につき頒布開始
11月1日 館だより「飛騰」第11号発行
このように見て来ますと、一日一日、時を重ねるにつれて、龍馬スピリットを旗印にした当館前進の歴史が刻み込まれているように思えます。今後も皆様のご支援ご指導を得て、更に、より親しみやすい龍馬記念館を目指して進んで行きたいと思っております。

「痛恨・龍馬暗殺」展の紹介

学芸専門員 下元正清

主催・会場 高知県立坂本龍馬記念館
期 間 10月30日 - 11月30日

1、龍馬暗殺の概要（通説）

薩長連合や土佐藩の大政奉還建白運動で、重要な役割りを演じた龍馬は、幕府にとって許しがたい存在であった。そのため、新選組や見回組、奉行所の役人らは、龍馬を執拗につけねらっていた。

龍馬と慎太郎が京都・近江屋で暗殺されたのは、慶応3年11月15日の夜であった。

慎太郎はこの日の夕方から龍馬の下宿近江屋を訪れ、宮川助五郎引き取りやその他の問題について話し合っていた。そこへ岡本謙三郎や菊屋峯吉が入って来たため、龍馬と慎太郎はそれまでの話を止めて世間話に移った。

やがて龍馬の言いつけで、峯吉がシャモを買いに席を立った時、謙三郎もちょっと用があると行って席を立った。

7人の刺客が近江屋を訪れたのは、謙三郎と峯吉が連れ立って外へ出た直後である。

取り次ぎに出た龍馬の下僕藤吉に、「私は十津川郷の者だが、坂本先生ご在宅ならばお目にかかりたい」と言って、名札を渡した。

名札を持って二階へ上がった藤吉が、龍馬に名札を渡して再び階段の所へ出て来た時、ひそかに上がっていた刺客に切りつけられた。

刺客はさらに奥の八畳の間に走り込み、抜く手も見せずに龍馬と慎太郎を切りつけた。この時、刺客の一人が「こなくそ」と叫んだ。

龍馬と慎太郎は刀を手元に置いていなかったため小刀で立ち向ったが、とても防ぎ切れるものではなかった。

龍馬は即死。33歳。藤吉は16日に絶命。25歳。慎太郎は17日に絶命。

30歳であった。

刺客の立ち去った暗殺現場には、刀の鞘と瓢亭の焼印のある下駄一足が残されていた。

葬儀は海援隊、陸援隊の手によって、18日八ツ時（午後2時頃）から行われ、三人の遺体は東山霊山に手厚く葬られた。

上述の通説は、暗殺現場へ最初に踏み入れた峯吉の後年の回顧談、「維新土佐勤王史」、岩崎鏡川の「坂本と中岡の死」（坂本龍馬関係文書2）などから、郷土史家平尾道雄氏（元山内家家史編修所員、故人）が体系化したものと言ってよい。

2、龍馬暗殺の通説に対する疑問

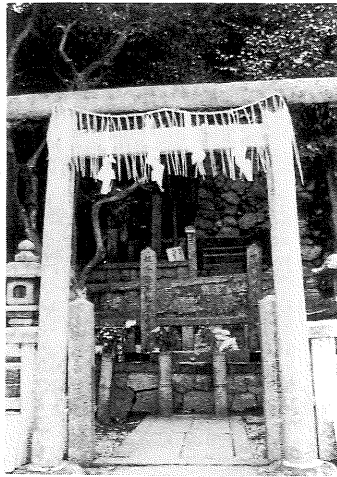
上記の通説について、当時龍馬と関わりのあった人々の書簡、日記等や、峯吉のあいまいな記憶に対する不信感もあって、通説を覆えすような事実が次々に出ている。

勿論それらの一部は、平尾氏の生存中から判明していたが、平尾氏は自説をまげていない。

今回の企画展では、その辺を明らかにしたい。

○龍馬絶命の日は、15日ではなく16日ではないか。

○三人の葬儀は18日ではなく、17日の夜、藩命によって執行されたのではないか。



▲坂本龍馬、中岡慎太郎の墓（京都東山の霊山墓地）

○海援隊士宮地彦三郎は、15日近江屋へ立ち寄り龍馬に会っている。など

3、龍馬らを襲った刺客とその黒幕（命令者）
龍馬ファンにとって最も関心のある問題であるが、結論から言うと、刺客の名も黒幕も今もって不明である。

○刺客としては、新選組、見回組、高台寺党（伊東甲子太郎一派）、土佐藩士、桐野利秋らの名前があがっているが、見回組とする説が最有力である。

○黒幕としては、会津藩、幕府有力者、薩摩藩があがっている、刺客を見回組とした場合は会津藩が有力になる。

これらについても、一通り紹介したい。

4、龍馬や慎太郎の死に対して、土佐藩が冷淡な態度をとった。

山内容堂の大政奉還建白書に副署したのは、神山佐多衛、福岡藤次、寺村左膳、後藤象二郎の四人で、いずれも京都の土佐藩邸の重役である。

このうち、寺村は「寺村左膳道成日記」の11月15日の条で、「然るに此者兩人とも近比之時勢ニ付、寛大之意を以黙許せしと雖ども、元御国脱走者之事故未御国之命令を以、兩人とも復籍の事ニも相成ず、其儘ニ致し有し故表向不関係之事」と記している。

龍馬や慎太郎はかつて脱落したとはいえ、この年の四月赦されて、それぞれ海援隊長、陸援隊長に任命されている。またこの二人は藩を超えて活動し、諸藩から高く評価されている。したがって藩がこの二人から受けた恩恵は、決して少なくないのである。

そういうことは、京都土佐藩邸の重役ともなればよく理解していると思われるが、なぜこのように冷たい態度をとったのであろうか。

5、龍馬没後のお龍の身のふり方一略一

6、龍馬没後の海援隊 一略一

以上の内容は自作パネル18枚で表し、1Fメイン展示室北ホールに展示する。

7、借用する資料の展示——B2資料展示室

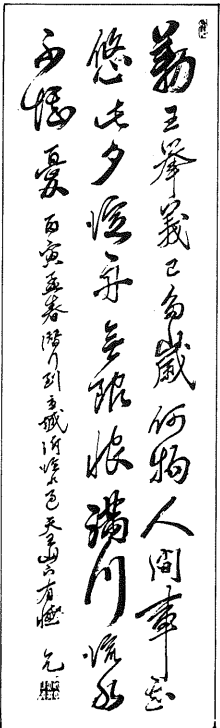
この部屋には、龍馬らが暗殺された時、その部屋にあった「血染めの屏風」「血染めの掛軸

をはじめ、「龍馬没後の海援隊」（年表）、「いろは丸沈没関係資料」等が常設的に展示されている。

今回の企画展では、神戸市の荒尾親成氏所蔵の資料8点をはじめ、その他から5点借用して展示する予定である。

今回のテーマは私共の力に余るものであるが、お客様のご期待にこたえて、精一杯の努力をする所存である。

—終—



木戸孝允書（神戸市 荒尾親成氏蔵）

予告 春の企画展
「坂本龍馬と福井藩」

期日 平成7年3月19日 - 5月5日

入館状況

平成6・9・30現在（開館以来1066日目）	
○総入館者数	430,206人
○最多入館 平成5・5・3	3,700人
○最少入館 // 6・9・29	23人(台風)
○本年度最多入館 // 6・5・3	1,989人
○本年度最少入館 // 6・9・29	23人(台風)
○本年度1日平均入館者数	368人

風雲児 吉村虎太郎 (2)

東津野村 上田茂敏

彼は庄屋の職を通して、民の苦しみはこの幕藩体制にあることを痛感していた。文久元年武市瑞山の「土佐勤王党」の檄が出るや直ちに加盟、翌年二月長州、九州を探索、二十七日時勢の急なことを武市に説き「土佐勤王党今起つべし」と進言するも、瑞山は一藩勤王を唱えて譲らないので、彼は宮地宜蔵、曾和伝左衛門を誘って松の鼻から舟を漕ぎ出した。その時「その舟返せ」と呼ぶ者がおり引返すとそこに瑞山が立っていて「吉村や宮地はとめてもいくまいが、曾和は藩庁のことを知るためどうしても必要なので、残しておいてほしい。吉村、宮地ええろうがよ」党主の折入っての頼みに承諾すると曾和は手にしていた通行手形を吉村に渡して別れた。三月五日夜彼は「この度藩庁より鳴津家への使者として明日出発することになった……」と称して宴を催した。母雪は「四方に名をあげつつ帰れ帰らずは後れざりしと母に知らせよ」と彼を励ました。翌日見送りの人は西地まで続いた。彼は玉川壯吉と二人馬をおいつつ別れをおしみ西地では「会い見れば語り尽くすと思えども別れとなれば残る言の葉」「御縁があらば又」と言い残し馬上の人となり、一鞭くれて大越を駆け抜け、宮野々では馬上より曾和から貰った通行手形を示し、関守からは「御苦勞様でございませう」と見送られている。

3、心斎橋に 兜を割りし

夕べもあった 口惜しや
寺田屋の変 舟牢に
風雨冷たし 我丹心を

知らず又鳴く 不如帰

そして大阪に来た虎太郎は心斎橋をぶらついていると骨董屋がありその前に古びた兜が飾ってあった。「これ主人この兜は古くて骨董として値打ちがあろうが実戦の役には立たぬと思うが……」とからかった。主人は戦国時代のものだから斬れない」という。彼は「わしの刀でも斬れると思う」と口をすべらして、ついに兜を斬らされることになる。台上に兜を置かした虎太郎はそれに一礼し刀を抜いて上段に振りかぶり気合と共に振り下せば、刀は鉢金を割ってしころに及んでいて、見物人達の拍手喝采を得、主人からは尊敬され非常に親しくなった。

四月二十三日早晩虎太郎らが伏見に舟をつけると昨夜寺田屋の変があった後で薩摩藩士に捕えられ、その月末に土佐藩に引渡され五月十三日舟牢で土佐に送還されることになった。その時彼は「首を回らせば蒼茫たり浪速城、蓬窓又聴く杜鵑の声、丹心一片人知るや否や、家郷を夢みず帝京を夢む」と歌った。

4、文久三年 八月なかば

天忠組の 意気高し
されど政変 ああ無情
風に乱れる 紅葉のように
虎太郎散りし 吉野山

土佐に送還された虎太郎は、牢獄で十二月を迎えた。二十五日に恩赦があり自由の身となった。資金調達遊学三年の国暇を得て二月十二日高知下町を発って上京東奔西走している内に八月十三日攘夷親征の詔勅が出され、中山忠光卿を隊長に天忠組を組織五条代官を血祭としたが翌十八日政変で拳兵の明分を失って、追討の幕軍のため転戦、東吉野鷲家谷で「吉野山風に乱るる紅葉ばは我打太刀の血煙と見よ」の辞世を残して倒幕の先駆者として散華した。年二七。

「案内図録」の紹介

学芸専門員 岡林春雄

待望の当館案内図録がこの程完成しましたので、その概略をご紹介します。

本書の体裁は、A4版65ページ左綴じカラー版、表紙には、おなじみの坂本龍馬の立像写真を取り入れております。

案内図録



高知県立坂本龍馬記念館



高知県立坂本龍馬記念館

案内図録の表紙及び裏表紙

表紙を開きますと、館長のごあいさつ、目次と続き、当館誕生のいきさつが2ページにわたって述べられております。そして当館の建つこの地の歴史的な位置づけを中心とした解説、続いて「建物も展示品」という当館のユニークな外観と設計思想及び主な仕様等をあげております。

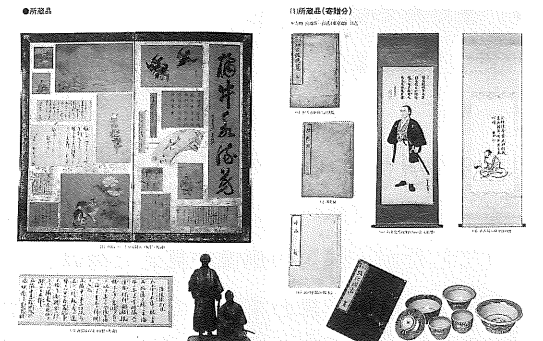
次のページを開きますと、1階のメイン展示室の紹介があります。

七つのステージを、それぞれ見開き2ページの形式で、中央にステージ全景、周囲にそれぞれの展示物を配してあります。

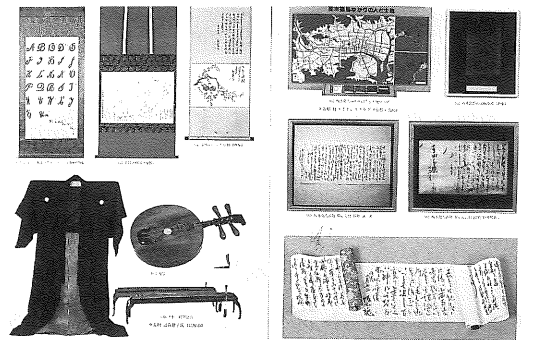


葛藤のステージ紹介

続いて、各ステージの中の写真に入り切れない資料を、2ページに取り出して示してあります。その後には、所蔵品、寄贈品、寄託品、自作パネル、その他の写真が掲げられています。



所蔵品のページ



所蔵品及び寄贈品のページ

一連の写真が続いた後、所蔵品、寄贈品、寄託品等について、一品一品解説をしてあります。

そして最後に、坂本龍馬の年表を見開き2ページにまとめてあります。これは、ここで改めて龍馬の前向きで、柔軟な生きざまを回顧する意味で書き出したものです。

以上概略をご紹介しますが、この図録は館内でご希望の方にお頒けする予定になっておりますので、ご利用くだされば幸いです。

お 知 ら せ

当館の案内図録を郵送ご希望の方は、1冊800円と送料310円を、郵便局の口座振替でご送金下さい。ご注文とお払込みが同時にできますのでご利用下さい。郵便振替口座番号は、01640-5-15946「高知県立坂本龍馬記念館」です。



拜啓 龍馬殿

- また来てしまいました。昨年は台風上陸による大変な暴風雨でしたが、「桂浜の龍馬の銅像をどうしても見たい！」という気持ちを抑えられず、風雨の中を“椿の小道”を友人と二人で駆け抜けました。とても不安な道のりでしたが、龍馬の銅像が見えた時は、「りょうまあ！」と思わず叫んでしまいました。

どんなに雨が降ろうが、風が吹こうが、悠然と立つあなたの姿は、何とも言い表しような感動を与えてくれました。これこそ龍馬だと思わずにはいられませんでした。

長崎へ帰ったら、また亀山社中に足を運んでしまいそうです。

(7月26日 長崎県 H・A 女性)

- 高校時代、あなたと出会って6年がたちました。あなたと出会ってから、私はあなたに魅せられてしまい、大学の卒論まで深入りしてしまいました。そして、ついに今日、土佐へ、あなたの生まれた国へ来ることができ、感無量です。

あなたが見たこの海を、自分の目で見ることができました。あなたはこの海を見て育ち、「世界の海援隊でもやらんかな」とおっしゃったそうですね。この大きな海を見ていると、自分もあなたのように、大きな夢を追いかけみたいと思います。

あなたには遠く及びませんが、あなたのように素敵な青春を送りたいと願っています。

(7月29日 長崎県 T・N 男性)

- 今まであまり龍馬のことを知りませんが、ここへ来て龍馬のことをもっと知りました。

と思うようになりました。

幕末の混乱の時代に生きた龍馬にとって、生きるということは自分を貫ぬくことであり、それが彼の青春のすべてであったように感じました。

何かを見失っている最近の私達にとって、龍馬の生き方は一つのヒントになりそうです。

(8月5日 滋賀県 H・H 男性)

- 憧れの龍馬さんの高知へ来て、とても感謝しています。昨日は龍馬像の前で、土佐鶴を飲みました。そして、ここで彼女と結婚の約束をしました。これから、毎年、高知へ来たいと思いました。

(9月8日 石川県 S・K 男性)

題字「飛騰」について

文久元年(1861)10月11日、龍馬は剣術修行のため、1か月の国暇を得て、讃岐丸亀の矢野市之丞の道場へ旅立った。この日、樋口真吉は、日記に「坂龍飛騰」と記した。

龍馬は更に国暇延長の許可をもらい、極秘裡に長州へ赴いた。彼は武市半平太の久坂玄瑞宛親書を携えていたのである。

長州萩に着いた龍馬は、久坂玄瑞を訪れて半平太の親書を手渡し、国事について会談する。

今まで一介の武芸者に過ぎなかった龍馬が、この旅を機に勤王の志士へと脱皮していくのである。矢野市之丞の所へ行った目的を予め知っていた樋口真吉は、龍馬への期待をこめて「坂龍飛騰」と記したのであろう。翌2年3月、龍馬は脱藩する。(下元書)

館だより “飛騰” 第11号

平成6年(1994)11月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

Tel (0888) 41-0001